

1 学期研究授業レポート

2016.5.29 加納篤

4 年国語「話し合いのしかたについて考えよう」

子どもは学びを楽しんでいたのか？ → 「考える子」の姿は見られたか？

結論：学ぶ楽しさを味わう途上にはいたが、楽しむまでには至っていなかった

→ 聞き方・話し方について気づきは得られていたが、話し合いの進め方についての気づきは少なかった。考えさせたい/気づかせたい「言葉の力」を全ては網羅できなかったのも、本時で見られた「考える姿」では不十分である。

理由：

(1) 言葉との主体的な対話を促す

子どもの実態：「話す」 発言の声が小さい、語尾が不鮮明、まとまりがない、冗長

「聞く」 説明の途中で口を挟む、私語や手遊びが目立つ、

聞こえなくても放置・無関心

「話し合う」 自分を主張することには意欲的、発言は人任せ

一人一人の子どもに焦点を当てれば、それぞれの要素に軽重はあるが、クラス全体の印象となれば、概ね上記のようになる。だから、これまで折に触れ、聞き方・話し方・話し合い方について指導してきた。

題材の価値：CDに収録された話し合いモデルと自分たちの話し合いを比較し、「よりよい話し合い」を考える対象として取り上げ、子ども自身が理想の話し合いに近づくよう自身で実際に話し合う体験をする。そのふり返りも含めて、「話し合う」ことについて、考えを深めることができる。

教科書にあるから勉強するのではなく、子ども自身が自分の言葉の力、クラスの子の言葉の力を高めるために、自分たちで考えるという必要感を持ち、自分事として「言葉と対話する」場を仕組んだ。実際に、子どもから出された議題には、「廊下を走る問題」や「消しバト問題」「勝手に話さないようにするには」「落し物を減らすには」など、身近な自分たちの問題が多く見られた。

本時で見られた子どもの姿

- ・議題が自分事として捉えられていたからこそ、話題が逸れそうになった時すかさず指摘することができていた。
- ・「最後まで聞こうよ。」と、途中で遮られ話しあぐねていた子を支えようとしていた。
- ・「何か関係あると思って話しているんだよ。」と、まだつながりが見えていないにもかかわらず、自分の考えを保留して相手を理解しようとする姿が見えた。
- ・モニターが、自分が賛成か反対かではなく、話し合いの様子についてコメントしていたのは、本時の課題が意識できていたから。
- ・「消しバト問題」に関しては、全員が反対意見でスムーズに進行し、工夫された発言

こそ見られたものの関連付けて練り上げることができず、考えが深まらなかった。

(2) 他の考えとの協働的な対話を促す

「考えをうまく言葉にできない状況をお互いに大切にし合い、その言語化の過程を教師も周りの子どもも支え合う学びの場」が、ふり返りの場面で見られた。「今日はいつもよりいっぱい発言できたからうれしかった。」とふり返ったK子に対して、「なぜそう思うの？」と訊くと「気持ちが全部言えたから。」と応えた。「なぜいつもはできないのに今日はできたの？」とさらに問い返すと、応えあぐねてしまった。すると、K児やO児たちが「人数が少なかったからじゃない？」「恥ずかしくなかったからでは？」「気持ちよく話せる聞き方をしてくれたからじゃないかな。」とK子の思いを付度して代弁した。改めて「どれが一番近いの？」と尋ねると、「気持ちよく話せる聞き方をしてくれたから、かな。」とK子が応えたとき、授業者としては、アクティブリスニングのよさを強調するいい機会だと考えたのだが、すかさずモニターをしていたA児が「でも、そんなにいい聞き方をしていなかったよ。」と指摘。

結局、アクティブリスニングのよさを強調することはできなかったが、他の考えとの協働的な対話が垣間見られた、授業者にとっては楽しい時間になった。

(3) 自分の学びとの省察的な対話を促す

本時の学びをふり返る時間を、対話形式で15分とった。紹介されたふり返りの中に「(モニターしてみて)自分たちも声が小さかったんだな、と思いました。」や「(アドバイスされてみて)自分たちもキツイ言い方をしてしまったんだな。」といった、実感を伴った感想が見られた。「審判をしていたら、(話し手に)反応していない人が気になりました。」というふり返りからは、「自分だったらもっと反応を返してあげるのに。」といった思いがうかがえる。

次時では、本時の「話し合いの様子」を電子黒板に表示し、話し方や聞き方の様子やそのときの思いについて語り合った。特に指定はしなかったのだが、「あゆみ」に書いてきたふり返りを、学級通信に載せ配付した。今後の彼らの「話し合い」に期待したい。

おまけ：

理科部の「後出し指導案」による事後研に刺激されて、国語部では「リフレクション」に挑戦してみました。プロンプター（聞き出す人）の司会の下、授業者（加納）に経験された授業の、授業者による意味づけを参加者と共に促していただきました。

私の都合で授業翌日の整理会になったにもかかわらず、時間を短く感じる充実したふり返りができました。「批判や授業観の押し売りでは、授業力は向上しない。自ら学ぶ存在としての教師本人の気づきを尊重する」リフレクション。考える子を育むには、その前提として、考える教師にならなければと、改めて気づいたブロック研になりました。次回のAブロックのリフレクションに参加してみませんか？